

さまざまな経験やそのときどきの想いを
糧に築きあげて昨日より今日、
今日より明日の人生を充実させている、
にやまけい たろう
仁山溪太郎さんの生き方を紹介します。

One's Life
(より豊かに生きるためのヒントをお伝えします)

地元で暮らし 青森の良さを描きたい



漫画家 仁山溪太郎さん

【Profile】青森市出身。
2018年『津軽先輩の青森めじゃ飯!』で漫画家デビュー。趣味は、食・登山・キャンプ・車。

図書館が漫画家への第一歩

青森市に住みながら青森の食にこだわり、その背景までを深掘りするグルメ漫画家・仁山溪太郎さん。『津軽先輩の青森めじゃ飯!』(秋田書店)は全4巻のシリーズものとして完結した。東奥日報にも「青森めじゃ飯めぐり」が連載され、その合間に、読み切り短編で「本州最北ドライブ旅」(チャンピオンRED6月号)など、郷土を題材とした作品を青森市内のアトリエで描いている。実は、仁山さんに漫画の師匠はいない。小学校から好きで絵を描き始め、高校になってからはアウガ6階の青森市民図書館に入り浸り、『アニメージュ』(徳間書店)などの雑誌が手本となったという。「当時『スラムダンク』が全盛で、ひたすらまねして描いていました」と笑顔で語った。そして、14年後の現在、青森市民図書館には『津軽先輩の青森めじゃ飯!』が、4巻そろって郷土の作家コーナーに配架されている。

「まさか、自分の本が図書館に配架されるなんて夢みたいです」と話す。

遅く来た「反抗期」

青森市内の高校を卒業後、漫画家の夢があったが両親には「美術教師になる」と話し、東京造形大学(八王子市)に進学。そこでは漫画ではなく美術の基礎であるデッサンに打ち込んだ。卒業間際に担当の先生から言われた一言が今でも忘れられない。「キミは青森出身だから、自分が持っているものを武器に自己表現していきなさい」。卒業後に、スーパーマーケットのアルバイトとして一時的に働きながら、仁山さんは「自分の武器とは? 持っているものとは?」と自問自答した。その結果、たどり着いたのが「絵を描く仕事しかない」という覚悟だったという。

漫画家になることは、両親、家族の反対はなかったが、とにかく心配された。高校、大学、サークルなどで漫画家を一緒に目指した友達はいずれ他の仕事に転向した。「自信はなかったけど、あきらめたくない。もっと言えば社会に負けたくないかった。【遅く来た反抗期】みたいなものでした」と振り返った。柳のようにしなやかで、外見は温厚そうに見えて頑固。まるで、津軽のじよっぱり、そのものだった。

青森をテーマに漫画家デビュー

その頃、尊敬する漫画家さんが自分の地元を題材にして作品を書いていたことにヒントを得て、青森を舞台にしたものを書きたいと考えるようになった。食べ物を知ればその土地柄がわかるのではないかと思い、郷土料理に絞って1作品を書きあげた。

デビューのきっかけは、直接出版社の担当者に作品を見せるため夜行バスに乗り東京へ、飯田橋の秋田書店に赴いた。その日は出版社教社を回りすべて断られ、ここが、この日最後の訪

問先だった。対応してくれた編集者は北海道出身の方だった。そこで美味しい食べ物の話で盛り上がり「馬が合って」単行本化が決定した。

夢は「感動させる漫画家」

地元で暮らしながら自身の仕事に取り組んでいる仁山さん。漫画家の業界では新型コロナウィルス流行以前から、リモートワークは当たり前だったと話す。スーパーマーケットでアルバイトをしている時も、別の漫画家さんのアシスタントの仕事在宅で引き受けるなど、そのスタイルが今も続いている。「漫画家は地元において、世界中の出版社とやり取りできる。だからこそ、地元の良さ、青森県や東北の自然のすばらしさを伝えるような作品を手掛けたい」と話す。

来年度は、弘前市内の小中学生の副読本として、郷土の新聞人の先達、陸羯南(くが・かつなん)を描く。これまでとはまるっきり違う新境地、「偉人漫画」に挑戦して現在執筆中だ。「絵柄も子供たちになじみやすい」というのが弘前市の教育委員会からの選考理由だった。苦しいけれどやりがいがあると、今回の題材に取り組んでいる。

将来は、高校生が主人公の青春漫画を描きたい。「これから何をやっていいか、迷っている人にグッとくるような漫画」だ。

(取材：千田 哲史)

※『津軽先輩の青森めじゃ飯!』2018年発売の処女作。東京から青森の新聞社に入社した飯美が、津軽弁の先輩の言葉に翻弄されつつも、青森のグルメ、自然、人情に感動する物語。

※陸羯南(くが・かつなん)安政4年(1857年)弘前市出身。ジャーナリスト。33歳で日本新聞を創刊し主筆兼社長となる。